やはり俺の将来設計は完璧過ぎる。R—18

U.G.N

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『やはり俺の将来設計は完璧過ぎる。』の結婚したての頃のお話。Ｒ―１８版です。

『やはり俺の将来設計は完璧過ぎる。』を読んでくださっていた方で、この作品のそんなシーンは見たくないとか、あのゆるふわラブコメギャグ空間を壊したくないと思う人は見ないことをオススメします。

もし、こっちのＲ―１８から読んで本編が気になった人は『やはり俺の将来設計は完璧過ぎる。』をよろしくお願いいたします。既に完結している作品です。

目次

一緒に住むということは ―――― 1
とにかく眠れ。さすれば我は救われる。 ―――― 8
昨日の真相、妹を辱しめるか？　親友を辱しめるか？ ―――― 15
ベッドの下の口紅 ―――― 25
小町におまかせっ☆ ―――― 33
孔明小町 ―――― 42

一緒に住むということは

1週間前、俺は人生のターニングポイントを通過した。

確かに、俺の昔の夢は専業主夫ではあった。だが、２４歳なんて若い年齢で結婚できるなんて思ってもみなかった。俺なんかより何十倍も素晴らしい人格者なのに３０半ばになっても結婚できない人が近くにいたから尚更だ。

はっきり言おう、俺は自分が勝ち組だと心から思っている。高2のときに抱いた俺とめぐりと彩加と小町の4人で1つの家に住むという夢を見事に叶え、しかも一緒に住む人間の4人のうち3人が公務員だ。

正直言って金には困らないし、1週間前から住んでいるこの家には俺にとっての癒しが3人もいる。

もう4人とも２０歳を越え、結婚もし、立派な大人になったと言ってもいいだろう。だが、歳がいくつになろうとも可愛いものは可愛いし、俺にとっての癒しは何歳だろうと癒しである。

俺とめぐり、彩加と小町。俺たち4人は1週間前の同じ日に同じ場所で同じ時間に愛を誓った。

新しい一軒家に4人で住むというのは結婚前から話し合って決めていたことである。まぁ、高校時代から俺の夢がこの4人で同じ家に住むというもので、当時から幾度となく俺がそれを言っていたため特に反対もなかったが。

そんなこんなで月曜日に引っ越しを始めて約1週間が経ち、新居にも結婚生活にもようやく落ち着きが出始めた頃、俺たちは大きすぎる問題にぶち当たっていた。

その事件は昨夜の、金曜の夜に起こった出来事だった。

俺たちの家は2家族が住むのだからそれなりに大きめの2階建ての家であり、部屋の数は1階にも2階にもそれなりにあった。

そこで俺たちが最初にぶつかった問題は部屋割りである。

戸塚家が2階で比企谷家が1階。またはその逆。他にも親たちが1階で子供ができたら子供たちが2階、などと色んな案が出た結果、最終的には最後の親が1階、子が2階という案で落ち着いた。

まぁ、子供はまだいないので、そうなるとしばらくは2階は誰も使わなくなるが、今は物置きにするということになった。

ちなみに、1階にはリビングなどの他に個室が3部屋あるので、1つは俺とめぐりの寝室、1つは彩加と小町の寝室、残りは俺と彩加の仕事部屋というか、まぁ学校で使う資料を作ったりするために勉強机が2つにパソコンが2台、コピー機、色んな本や資料

が置いてある部屋だ。一応小町も保育士の仕事をしているのでこの部屋に机を置こうかとも言ったのだが、寝室でやるからいいよと言われ、それならせめてこれくらいはと彩加と小町の寝室は俺たちよりも少し広い方を使ってもらうことにした。

因みに部屋の場所は俺とめぐりの寝室と彩加、小町の寝室が横に並んでおり、仕事部屋が俺とめぐりの寝室の廊下を挟んで向い側にある。

つまり俺たちの寝室は壁を挟んで隣同士なのだ。

これがどういうことなのか、俺たちはその日が来るまで誰1人として気付くことが出来なかった。

もう1度言おう、事件は金曜日の夜に起きた。

――――

――

―

「ふう、やっと落ち着いたな」

「そうだねぇ、わたしは昼間とかにも色々とできるけど3人はそうも言ってられないしね」

「まぁ仕事があるからな。逆に言えばリビングとか、生活必需品の買い出しとかはめぐりに任せっぱなしになっちまったな。大変じゃなかったか？」
「全然。むしろこれからの生活が楽しみで楽しみで、すごく楽しかったよ」
めぐりはそう言いながらニコニコと笑顔を作る。
俺とめぐりは寝室のダブルベッドに腰かけ、肩を寄せながらそんな話をしていた。
いっても俺たちはまだ２５と２４。全然若い上に結婚したてのラブラブ夫婦だ。お互い仕事や引っ越しで多少疲れていようが、こうして肩を寄せ合い、今日あったことを話すだけでも疲れが吹っ飛ぶ。
これが１０年後、２０年後となると寝ないと疲れが取れない、みたいになってしまうのだろうか。朝起きて飯食って、仕事へ行って、帰ってきて、飯食って風呂入って、次の日の準備をして寝る。そんな毎日になってしまうのかと思うと、歳はとりたくないと切実に思ってしまう。
「八幡も仕事大変でしょ？」
「まぁそうだな。つっても2年目だしそこそこ慣れたけどな。進学校だからそこまで問題児もいねぇし、俺みたいな面倒臭い奴もいない」
「ふふっ、八幡だって優秀だったじゃない」
「優秀な生徒と優等生は違うからな。にしても、相変わらず彩加の人気はハンパねぇ」

「あー、若くてあの容姿にあの性格だからねぇ。人気出ない方がおかしいよ」
「マジで指輪つけてなかったらヤバかったかもな。あの指輪が生徒や彩加自身にも抑止力になってる気がする」
「いやいや、たとえ未婚だったとしても彩加くんは生徒に手を出すような人じゃないでしょ!?」
それもそうか。そんなアホな会話をしているとめぐりが俺にもたれ掛かっていた身体を離し、部屋の角に置かれたドレッサーに向かう。
めぐりがドレッサーから細い木製の耳かき棒と綿棒を手に取り俺に見せてくる。
俺はそれを見るといつものかとフッと軽く笑みを浮かべ、身体を倒し、再び隣に座っためぐりの太腿に頭を乗せる。
「ふふっ、八幡は昔からこれをすると疲れが取れるらしいからね。今日は金曜だし1週間の疲れを癒してあげる」
「それはちょっと違うぞ。耳かきが疲れを癒してるわけじゃなく、めぐりがすることに意味があるんだ」
時刻は２３時５０分。
明日は休日だ。なので今日はゆっくりめぐりに癒されることにしよう。
カリ、カリと耳の奥に心地よい音が響く。昔からこの音が好きだ。めぐりの耳かきテ

クも付き合ってからの7年間でかなり上達しているはずだ。
左耳から聞こえるカリカリ音と右側頭部の柔らかさを堪能していると、近くの壁から何やら小さな物音が聞こえてきた。
目だけでめぐりを見てみると、特に気付いた様子もなく耳かきを続けている。
気のせいかと思い、再び耳かきとめぐりの太腿に集中すると、次は先程より少し大きめの音が聞こえる。
「……？」
流石のめぐりも気が付いたのか、音のした壁の方を向き、首を傾げている。
すると、次の瞬間俺たちはその音の正体に気が付いてしまった。
ギシッ、ギシッ、ギシッと何かが軋むような音と共に、誰よりも長く一緒に暮らしていた女性の初めて聞く喘ぎ声がほんの微かに聴こえてくる。
「……ッ！」
これは、流石に気付く。確かに、月曜にここに引っ越してきて部屋を決めたり荷物を出したりと大変な1週間ではあった。更に俺と彩加と小町は仕事もある。
しかし、明日は土曜日で仕事は休み。そして何より俺たちは新婚で歳も小町に関してはまだ22歳。つまり若いのだ。
俺とめぐりも色々とバタバタしていたため結婚してからそういったことはまだして

いない。それは彩加と小町も同じなのだろう。それに普通の話し声なら隣には聞こえない。

故に、それ故に、俺たちは誰も気が付かなかったのだ。

一緒に住むということは、ましてや部屋が隣同士ということは――

これは、一大事だ……

とにかく眠れ。さすれば我は救われる。

「……」

「……」

無言で耳かきは続く。身体の向きを変え、今は右耳からカリ、カリと気持ちの良い音が耳の奥に響く。

が、俺の耳にはそれ以外の音と声が微かに届いていた。チラリとめぐりを見たところ、どうやらめぐりにも聞こえているらしい。

どうする？　はっきり言ってこれは想定外過ぎる。1つ言えることがあるとすれば、俺たちが先じゃなくてよかった。

いやいや、これは大問題だ。そりゃあ俺たちはもう大人だし、結婚する前からそういったことをしていただろうこともわかっている。俺もそこまでガキじゃない。だが、まさか妹と親友のそういった行為を壁越しとはいえ聞いてしまうことになるなんて、それなんてエロゲ？

ていうか、妹のそんな声を聞かされている兄の身にもなってくれ。

「……これは大問題だな」

「……だよね」
　俺もめぐりも顔を真っ赤にさせながらそう呟く。やだ！　八幡たちってば超ピュア！
「明日緊急会議を開こう」
「……うん。いや、でも、その為にはわたしたちが聞いちゃったことを言わなきゃいけないよね」
「仕方ないだろ、これはいずれわかっていたことだし、一刻を争う」
「でもわたしだったら、それを教えられたら恥ずかしすぎるっていうか……」
　耳かきをいったん止め、俺たちはベッドに腰かけ直す。
「いや、まぁわからんでもないが、このままという訳にもいかんだろ。何か方法でもあるのか？」
「えっと、それなりの音を出すと隣に聞こえちゃうことを小町ちゃん達にも教えてあげる、とか」
「どうやって？」
「それは……実際体験してもらうとか……」
　めぐりが顔を赤らめながら言う。
　おいおい、それってもしかして……

「おまっ、まさか、俺たちもするってことか……？」
「ちちちち違うよ!?　その、ちょっと大きい声を出して隣に聞こえるって知らせるだけ！　それだけ！」
耳まで真っ赤にさせためぐりは手を胸の前でぶんぶん振って否定する。
あ、そういうことね。いや、別に八幡期待も勘違いもしてないよ？　ホントだよ？
「お、おうそうか。いや、でもそれをした後に向こうからいきなり何の音もしなくなったらそれはそれで気まずくないか？」
「うっ、確かに……」
「……」
「……」
お互い顔を赤らめ再び無言になる。
――それがいけなかった。
『……ああっ！　彩加っ！』
「……」
「……」

俺たちが無言になったからなのか、それとも向こうの声量が上がったからなのか、それはわからないし今はそれはどうでもいい。

おい、ヤバいぞ。これはヤバい。何がヤバいって、マジヤバい。

ちょっ、妹の本気の喘ぎ声が聞こえてくるとか、どういう反応していいのかわからないというか、なんというか、無茶苦茶興奮するのは俺だけなのだろうか？

いやだって小町だよ？　それこそ生まれたときから一緒に暮らしてきて、確かに俺が大学生のときは独り暮らしだったから小町とは離れてたけど、それでも１６年一緒に住んでて、２２年も俺の妹をやってるんだ。

大人になった大人になったと口では言うものの、心のどこかではやはり小町は何時まで経っても俺の妹で、何時までも子供だと思っていたのだ。

それは結婚した今でも。

俺のことをお兄ちゃんゴミぃちゃんと呼んで可愛らしく微笑んでいたあの小町が、あんな女性らしい声をあげるなんて想像もできない。

だが、実際問題その信じられないことがすぐ隣で行われていて、その証拠となりうる音と声までこちらに届いているのだ。

「……ッ」

そのことを改めて認識した途端、身体中の血液が一気に循環し始め、身体が熱くなる

のを感じる。
血液がある1カ所に集まっていくのがわかる。
今も1枚の壁を挟んで、向こう側から実の妹の淫靡な声が俺たちに届いている。
視覚情報は1つもない。なのに、今まで見てきたどんなサイトよりも何倍も興奮するということは、やはり『誰が』というのが最も重要なのだろう。
「……大詰めだな」
「ちょっ、生々しいから！　大詰めとか生々し過ぎるから!!」
「ばっ、声でかい！」
俺は慌ててめぐりの口を手で塞ぐ。
――またしてもやってしまった。無言になってしまった。
『彩加っ！　彩加っ！　あ、あああぁぁッ!!』
ちょおぉぉーー!!　向こうは熱中しすぎてこちらの声には気付かなかったみたいだが、もうホント生々し過ぎるんですけど！　絶対に今、俺の妹が達してたんですけど!!
はぁ、と溜め息をつきながら俺はめぐりの口から手を離す。これは明日すぐにでもどちらかの部屋を移動させなければいけないな。だが、今はそれよりも先にやらなければいけないことがある。
この微妙な空気をぶち殺すことだ。

向こうから聞こえてきていた音は鳴りを潜め、２つの部屋は静寂に包まれている。
しかし、静寂にも種類はある。
向こうは恐らく幸せに満ちた満足感ＭＡＸの静寂だろう。
一方こちらはどうだろうか？　めぐりは真っ赤になりながら俯き、俺は俺で真っ赤になりながらそっぽを向いている。
くっ、もういっそのこと殺せ！　何だこの苦しすぎる空気は！　俺とめぐりだって、結婚前には何度もしたことはある。めぐりの甘い声だって何度も聞いている。だが、不可抗力とはいえ自分達以外のソレを聞くというのはなんとも言い難い罪悪感というか、しかもその対象が自分の妹と親友のソレとなると背徳感が溢れてくるというか。
正直、限界である。感情が昂り、体温が上昇し、今すぐにでも横にいる愛しき嫁を押し倒したい衝動が喉のすぐそこまで来ている。
しかし、今それをしてしまえば隣の部屋の奴らの二の舞になる。簡単に言えば、小町たちに聞かれてしまう。
流石の俺も聞かれるとわかっていて行為に及ぶほどおかしな性癖は持っていないし、できればめぐりのそういった声は俺以外には聞かせたくない。
そんな思いが俺をギリギリのところで思い止まらせてくれている。
「……寝るぞ」

「……うん、それがいいかも」

俺の理性があとほんの少し弱ければ、きっと違う言葉が出ていたんだろうと思う。流石だ俺の理性。

俺とめぐりは大きめのダブルベッドへと入り、枕元のリモコンで電気を消す。

チラリと左側に目を向けると、めぐりが俺に背を向けるようにして寝ている。正直ありがたい。今めぐりの寝顔なんて見てしまえば、先程抑え込んだ理性が再び暴走を始めてしまうやもしれん。

俺も同じようにめぐりとは反対の方を向き、寝ることにする。

だが、俺の向いている方の壁は、隣の部屋側の壁。

つい数分前の出来事がフラッシュバックし、実妹が絶頂に達したときの声が頭の中で勝手に再生される。

「……ッ」

俺は自然と熱くなる下半身に意識を向けないように強く目を瞑り、強引に眠りに就くことにした。

昨日の真相、妹を辱しめるか？　親友を辱しめるか？

今日も今日とて新しい朝が来た。
しかしそれは、果たして希望の朝と言ってもいいのだろうか？
俺の妹は喜びとともに物理的にも胸を開いていたし、大空ではなく彩加を仰いでいた。
……朝っぱらから下ネタ全開でしたねスミマセン。
とにかく俺とめぐりは平日ばりに早起きし、今日これから行われようとしている緊急会議に向け、作戦会議を行っていた。会議のための会議というやつだ。
「……引っ越して僅か一週間。部屋を移動しようと言えば必ず理由を聞かれる。それも今日いきなり言い出したとなればあいつらからしてみれば心当たりがありまくる。つまり、気まずさのバーゲンセールだ」
「……できるだけ互いに気まずくないように、慎重に動くべきってことだね」
俺とめぐりはリビングの食卓で顔をできるだけ近付け、小声で会議を進める。
「そこで相談なんだが……彩加と小町、別々に知らせるのはどうだろうか？　彩加には俺から、小町にはめぐりから。同性から知らされた方がまだマシだろ？」

「うーん。確かにそうかもだけど……結局、私たち2人に聞かれたってことには変わりないよね？」

うーん。とめぐりと2人で唸っていると、パタパタとリビングに向かってくる足音が聞こえる。

俺とめぐりは慌てて顔を離し、めぐりは軽く欠伸を、俺はグーっと伸びをする。

いや、俺たち誤魔化すの下手すぎんだろ。

リビングの扉が開き、姿を現したのは我が妹小町であった。

「およよ？　お兄ちゃんたち起きるの早いね。特にお兄ちゃんが休日に早起きって、今日は槍でも降るのかな？」

「誰のせいだ誰の」

小声で小町の言葉に言い返すと、机の下でめぐりに脛を蹴られた。

「あはは、まぁ彩加くんは明日テニス部の部活があるし、4人が1日しっかりと揃うのは引っ越してから今日が初めてだからね。今日中に色々と決めておきたいこともあるし」

「決めておきたいこと？」

「え、えと、う、うん。その、あの、こうリビングのアレとかソレとか、家具の細かい配置とか、キッチンの色んな配置とか、とにかく色々だよ！」

「は、はあ」

うん、挙動不審過ぎるぞ。小町が若干引いてんじゃねーか。
それにしても、全くもって変わった様子はないな。そりゃそうか、向こうからしてみれば夜の営みが丸聞こえなんて思いもしないだろうしな。普通の話し声程度じゃ隣の部屋には聞こえないわけだし。
「彩加はまだ寝てんのか？」
何とか話を変えようと小町にいたってオーソドックスな質問をする。
「うん。ちょっと疲れてるみたい」
「……だろうねぇ」
今度はめぐりが小声で呟く。この馬鹿！　余計なこと言うな。小町には聞こえてないみたいだが、気を付けろと注意するためにもめぐりの足を机の下で軽く蹴る。
すると、めぐりがこちらをチラリと見て目で何かを訴えてきている。
（八幡だってさっき危ないこと呟いてたじゃん）
（それを注意したお前が同じことしてどうすんだよ）
（だからって蹴ることないじゃんか）
（お前だってさっき蹴ってきたじゃねーか。脛を）
（八幡は男なんだからそれくらい我慢してよ。わたしは女の子！　女の子を蹴るなんて最低だよ）

（女の「子」て、そんな歳かよｗ）
（カチン）
（あ……）
お互い一言も喋らずに目だけで会話を成立させる。が、成立させてしまったせいで、めぐりによる脛への集中攻撃が開始された。
俺もただでやられるわけにはいかないので、回避、回避、反撃、回避を繰り返す。
机の下で行われている攻防戦は未だリビングの扉の前に立っている小町によって終わりを告げた。
「あの、ここからだと丸見えだよ？　さっきから何してんの２人とも……」
くっ、そもそもこんなことになった元凶はお前と彩加だろうが。何ちょっと引いてんだよ。

――――
――
―

とりあえず小町とめぐりが朝食を作り始め、俺はそれができるまでソファーに座り

ニュースでも見ることにした。
さて、どう切り出したらいいものか。とりあえず朝食を食った後、話があるって言って彩加を呼び出すか……それともその場で2人に言ってしまうか……。
くそ、なんで結婚して早々にこんなことで悩まなきゃいけないんだよ。いや、だが絶対にいつかは起こっていた事だし、早めに発覚してよかったのか？　だが、こっちは妹の喘ぎ声を聞かされてめぐりと微妙な空気になるし、あっちはあっちでこれから真実を聞かされるわけで、良かったと思える点がマジで霞みまくりだろ。
ホント、真実は残酷過ぎる。
なら、嘘は優しいのだろうか。否、今回の場合は嘘をついてそれがバレたときの気まずさは計り知れない。
つまり結論はこうだ。詰んだ。
流れてくるニュースキャスターの声を聞き流し、そんな事を考えているうちにどうやら朝食が完成したようだ。
それと同時に彩加がリビングに入ってくる。
「おはよう。3人とも早いね」
「おはよ。だよね、しかもお兄ちゃんが休日に早起きしてるなんて何年振りだろ」
「ははは、確かに八幡は休日は昼まで寝てそうだよね」

……こいつら、本当に誰のせいだと思ってんだ。
もうこいつら全部バラしちゃってもいいんじゃね？　という思いが一瞬過る。
だが、そうもいかないよな。お互いのこれからのためにも。

――――

「なあ、やっぱり部屋の場所変えないか？」
朝食後、食器の片付けもそこそこに俺は先手を打った。
「え？　いきなりだね。どうして？」
それに反応したのは彩加だ。
「昨日めぐりとも話したんだが、やっぱり2階を物置きとしてだけに使うのは勿体ないと思ってな」
「でも子供ができたら子供たちを2階にするんでしょ？　そのときはまた部屋を移動するのは面倒じゃない？」
小町が俺の今さっき考えた理由に反論する。その子供ができる前の段階で問題が発

生したんだっての。だが反論されるのは想定内だ。やっと部屋を決めてベッドなどの荷物も置いたのにすぐ部屋を変えるなんて面倒に決まっている。

俺は横に座っているめぐりに目線で合図を送る。

実はさっき隙をついてめぐりに新しい作戦を伝えた。ていうかこれが最も全員にダメージが少ないと思う。まぁ多少彩加に負担がのし掛かるかもしれないが。

作戦はいたってシンプルだ。俺が彩加に昨日のことを話し、小町を説得してもらう。以上だ。

彩加も本当の理由がわかれば協力せざる得ないだろう。

「彩加。ちょっと来てくれ。2階を見てから話そう」

俺はまず廊下に彩加を呼び出す。めぐりには小町の相手をしてもらう。この作戦で最も大事なのは小町には何も知らせないということだ。

全てが明るみになったとき、最も傷を負うのは小町だろう。俺たちにあんな声を聞かれてしまっているのだから。

故に彩加には小町を傷付けないためにも小町にその真実を知られないように説得してもらうしかない。

そのためにはまず、彩加に真相を明かさなくてはいけないんだけどな。

「……？　八幡？　2階行かないの？」

廊下で立ち止まった俺を不思議に思ったのか、可愛く首を傾げる彩加。
２０歳を越えても彩加の可愛さは未だ健在である。今からこの可愛らしい顔が羞恥で染まると思うと興奮す、あ、いや、心が痛む。
「いや、２階に行く必要はない。ここで話がしたい」
「……？　うん」
彩加は俺の前に立ち、しっかりと聞く体勢に入る。
「……その、だな。非常に言いにくいことなんだが……昨日の晩、声が聞こえてきたというか、その、お前たちの部屋から」
しどろもどろになりながらも、何とか言葉を紡ぐ。
「……あ、えと、もしかして、き、聞こえちゃってた？」
彩加はすぐに何の事かを察し、顔を赤らめながら上目遣いで聞いてくる。
「全部ではない。全部ではないんだが……その、多分一番聞いてはいけない部分が聞こえてきたというか、ラストスパートの部分が聞こえてきたというか」
俺の言葉にプシューと頭から煙を上げる彩加。彩加でこの反応だ。実際に聞かれてしまった本人が知ってしまえばどうなってしまうことやら。
「どちらかの部屋を２階にしようというのはそれが理由だ。普通の話し声程度なら聞こえないんだが……まぁ、昨日のは普通よりは大きかったからな」

「〜〜〜〜〜ッ」
「そこで相談なんだが、小町に本当の理由を知られるのはマズいと思うんだ。聞かれた張本人だからな、知らない方があいつのためだ」
「……だね」
「そこでお前から小町を上手く説得してくれないか？　俺たちじゃあ説得力がないし、上手く知られないように誤魔化しながらさ」
「……あの、八幡。これぼくも物凄く恥ずかしいってことわかってる？」
　そりゃあそうだろうな。逆の立場だったら正直この場にいることも堪えられないだろう。
「だろうな。だがこれを知ったときの小町のソレは計り知れないものになるぞ」
「それは、わかるけど……」
「どちらにしろこれからのためにも、移動はしないといけない。生憎、聞こえるとわかっているのにするような性癖は持ち合わせてないからな」
「ぼくだってそんなの持ってないよ！」
「だろ？　だから、頼む」
「……わかった。まぁ逆の立場だったらぼくもこうしてただろうし、何とか言ってみるよ。あ、でも、昨日のことは絶対に忘れてよ？」

「わ、わかってる。とにかく頼んだ」

俺たちは互いに頷いて、リビングへ戻った。

結局、彩加が上手く小町を言いくるめ、今日は４人で部屋の移動作業に当てた。

２階に移動したのは部屋の中の物が少ないということで俺とめぐりになった。

まぁ、小町たちの寝室には小町の仕事机とかもあるしね。

とりあえず、これで最初の問題は一件落着だ。

ベッドの下の口紅

部屋の移動も無事に終わり、結婚生活もそろそろ慣れてきたとある土曜日。
俺は平日の疲れを取るために睡眠をしっかりととっていた。
具体的には昼前くらいまで。
「こーら、八幡。そろそろ起きないと、せっかくの休日が睡眠で潰れちゃうよ？」
俺のことを八幡と呼ぶのはこの家には2人、うち1人は確か今日は部活があるので朝から学校へ行っているはずだ。テニス部顧問も大変だな。
要するに、今俺を起こしているのは俺の愛する妻なのだろう。
「……それは違うぞめぐり。せっかくの休日だから睡眠で過ごすんだ」
「もうっ、彩加くんは朝から学校へ行っているのに、だらしないよ？　ほら、今日はお布団干したいんだからそろそろ起きて」
「布団なら明日干せばいいだろう。明日なら超早く起きてみせるから。俺やってやっから」
「それを今やってよ。それに明日は雨だから今日中に干したいの。もうそろそろお昼だよ？　いい加減にして」

う、めぐりの声に段々とイライラが増してる気がする。正直なところめぐりが怒っても全く恐くはないのだが、拗ねるとかなり面倒くさい。3日間一切話してくれないとか余裕にある。既に大学時代に体験済みだ。あれはキツい。

仕方ない、起きることにするかと身体を起こそうとする。

この時俺は何故ちゃんと目を開けて起きなかったのだろう。

「はぁ、起きないならチューしちゃう、ん!?」

「……う？　ん!?」

柔らかい感触が口に触れる。甘い匂いが鼻孔を擽り、驚きで目を開ける。

目の前には驚いたような顔をしためぐり。恐らく俺も似たような表情をしているのだろう。

寝ぼけていた意識が一気に覚醒する。

「……っ、はっ！」

「……ぷは」

お互い慌てて唇を離す。時間にして1秒もない、一瞬の出来事だった。事故とはいえ、もしかしたら今までのキスの中で一番時間の短いキスだったかもしれない。

小町と彩加は実はキスに関しては結構オープンな所があり、俺たちの前でもたまに一瞬触れるだけの軽い口づけをすることがある。

逆に俺たちは人前でそんなことは恥ずかしくてできない。それが例え一緒に住んでいる妹や親友の前だとしても。その代わりと言ってはなんだが、誰もいない2人きりのときはガッツリするタイプだ。

なのに、もう何回もしてきたガッツリなキスのときよりも心臓がドキドキいってるんだが。

いや、この動悸は不意打ち＋寝起きということが重なったからに違いない。だから、腹から下に掛けられている掛け布団の一部が少しばかり盛り上がっているのも寝起きだからに違いないのだ。

――――

――

―

「ガキじゃないんだから、ああいうテンションの起こし方はやめて欲しいものだ」

あの後めぐりは顔を赤くしながら「とにかく、着替えて下に降りてきてよ！」と言い、部屋を出ていった。

まぁ、いつまでたってもあの初な反応の変わらないで欲しいけどな。

俺は寝間着から『Ｉ　??　千葉』Ｔシャツに着替え、寝間着を畳んでベッドの上に置き、ベッド脇の棚から眼鏡を取って掛ける。

実は２０歳を越えた頃から徐々に視力が落ちていき、今では普段はコンタクトをしている。が、休日の家にいる時までコンタクトはしたくないので家にいるときは眼鏡をしているのだ。

他の３人からは絶対に普段から眼鏡をしていた方がいいと口を揃えて言われるのだが、それは勘弁してもらいたい。

家にいるときやちょっとコンビニに行くくらいの時は眼鏡の方が楽なのだが、ちゃんと外出するときや仕事に行くときはコンタクトの方が何かと便利だ。

なので俺の眼鏡姿は生徒たちや先生方は知らない。学校でも眼鏡で行けばお兄ちゃんモテるかもしれないのにと小町に言われたことがあるが、その直後めぐりに絶対に学校へはコンタクトで行けと言われたからという理由もある。

眼鏡１つで俺がモテるとは到底思えないが、めぐりがそれを望むならまぁそうした方がいいのだろう。

そんな事を考えながら眼鏡のレンズを専用の布で軽く拭く。と、手を滑らしてしまい布がヒラヒラと床に落ち、そのままベッドの下へ入り込んでしまった。

「何だよその華麗な吸い込まれ方は」

ベッドの隙間へ入り込んだ布切れに文句を言いながらしゃがんで手をベッドの下に入れる。
布はすぐに見つかった。のだが、その布は何かに覆い被さるように落ちていたのだ。
布を引っ張り出すと、その何かも一緒に外へ転がってきた。
それは大きさ的にシャチハタのハンコくらいの大きさで筒上の形をしていた。
何でこんなところにシャチハタ？　と思いながらそれを拾うと、それはシャチハタではないことに気づく。
つーかこれ普通に口紅だな。うん、超口紅。
「いや、だから何で口紅がこんなところに落ちてんだよ」
めぐりが化粧をしていた際に口紅を落とし、ここまで転がってきたと考えるのが妥当ではあるのだが……
俺は部屋の角にあるドレッサーに目を向ける。化粧はいつもあそこで行われるのだが、あそこで落としてここまで転がってくるとは到底思えない。
「……って考えすぎか。あそこで落としたとは限らないし、持って歩いてた時に落としたってとこだろ」
俺はそう結論付け、その口紅をドレッサーの上に置いて部屋を出ることにした。

―
―
―

「そういや、さっきベッドの下に口紅が落ちてたから、ドレッサーの上に置いといたぞ」
俺は朝食兼昼食を食べながら、先程あったことをめぐりに話す。
食卓には俺とめぐりだけ。彩加が部活でいないことは知っていたが、どうやら小町も今日は保育園で保育士たちの会議があるらしく不在だった。まったく、休日だというのに大変だこと。
「口紅？　わたしの？」
「いや、それは知らねーけど、俺たちの寝室にあったんだからめぐりのだろ？」
小町がわざわざ俺たちの寝室で化粧する理由がないしな。
「どんなの？　わたし別に無くしたりしてないはずだけど……」
「どんなのって、口紅に詳しくないからよくわからんが、普通の口紅だったと思うぞ？　ああ、何か塗るところに窪みというか割れ目みたいなのがあったな。口紅ってああいう風になってるのか？」
「窪み？　割れ目？　……っ!!!　は、八幡、それベッドの下にあったっ

て言った!?」
「ん？　おお。そうだけど？」
「今は!?」
「だからドレッサーの上に置いといた、って……」
俺が全部言い切る前にめぐりが慌ててリビングを出ていった。階段を上がり、寝室の扉が勢いよく閉まる音がする。そんなに大事な物だったのだろうか。
１０分くらい経ってから、めぐりがリビングに戻ってきた。顔がほんのり赤いのは何故だろうか。
「おー、めぐりのだったか？」
「う、うん。えっと、ちょっと前に無くしたのだった。見つけてくれてありがとね……」
めぐりは何故か俺と目を合わせないようにしながら、再び食事に戻った。

食事が終わった後寝室に戻ると、ドレッサーの上の口紅は消えていた。どうやらめぐりがちゃんとしまったらしい。

小町におまかせっ☆

土曜の夜。夕方には帰ってきた小町と彩加も加えて４人で夕飯を食べた後、各々で風呂に入り、今八幡と彩加は授業で使う資料の作成中のようで仕事部屋に籠っていた。

リビングのソファーでは小町とめぐりがゆったりとお茶を飲みながらテレビを見ていた。

いや、若干１名ソワソワしているのだが。

「……あのぉ、お義姉ちゃん？　何かソワソワしてるけど、何かあった？」

自分の横で落ち着きのないめぐりに小町が耐えきれずに聞く。

「え、えと、実は小町ちゃんに聞きにくいことを聞きたくて……」

「何ですか聞きにくいことって。それはお義姉ちゃんにとって厄介なのか、小町にとって厄介なことなのか、どっちですか？」

「……両方かな。で、でも、同じ女の子として聞きやすくもあるし、同じ女の子だから聞きにくいことでもあるというか……」

「あー、もうそこまで言ったなら何でも聞いてください。お義姉ちゃんのためなら、協力できることなら何でも協力するんで」

小町は姿勢を正して、めぐりに向き合う。
小町のその態度を見て決心したのか、めぐりは1つ頷くと、話し始める。
「う、うん。ちょうど男子たちもいないし思い切って聞くけど……こ、小町ちゃんって、その、ああいうのってどうしてる？」
「ああいうの？」
めぐりの言う『ああいうの』が理解できない小町は素直に首を傾げる。
「そ、その、1人でする、アレ、とか」
「……もしかして、オから始まるやつですか？」
「……う、うん」
小町の言葉に顔を赤らめながら僅かに頷くめぐり。
「それは、頻度とか、そういう話でしょうか？」
「あ、いや、えと、それも聞けるなら聞きたいんだけど、その、やり方というか、道具は使うのか、とか」
「……あー、えっと、これは小町だけが話すのでしょうか？　それとも小町が言ったらお義姉ちゃんのも代わりに教えてもらえるのでしょうか？」
「そ、それが交換条件なら、言います」
この2人はリビングでいったい何という話をしているのだろうか。だが、めぐりには

それなりの訳があった。
「お義姉ちゃんがどういった理由でそんなことを聞くのか知りませんけど、まぁ別にいいですよ？　実は小町そういった話をするの初めてなんで、他の人のとかちょっと興味ありますし」
　小町はお茶をグイッと飲み干すと、さぁ来いと言わんばかりに両腕を広げる。
「そ、それじゃあ、ちょっと質問するね？　えっとまずはそういうことってする？」
「高2辺りはほぼ毎日してました。兄が家からいなくなったんで少し声を出してもいいと思うと、歯止めが効かなくなったというか。大学卒業してからは本当にたまにしかしなくなりましたね。平日は仕事でそれどころじゃなかったですし、休日もほとんど寝て過ごしてましたし。彩加と暫くしてないときとかにちょっと寂しくなってしてたくらいですね。結婚してからはまだしてません」
「う、うん。そっか。随分としっかりと教えてくれるんだね……」
「まぁ女の子同士ですし、小町がちゃんと言えばお義姉ちゃんも言わざるを得ないでしょ？」
　ニヒヒと意地悪な笑みを浮かべる小町。
　めぐりは少したじろぎながらも、気を取り直して次の質問に入る。
「じゃあ、やり方とかは？」

「基本指ですよ？　たまにピンローとかも使いますけど、何だかんだで指が1番自由自在に操れますので」
「じ、自由自在に……」
「はい。自由自在に」
　本当に何を聞いているのだろうと我に返りそうになるめぐりだが、まだ1番聞きたいことは聞けていない。
「これが1番聞きたいんだけど、道具とかは、どこにしまってるの？」
「小町は道具はピンローしか持ってないので、化粧箱に入れてますね」
「それがバレたことってある？」
「ないですよ？　だいたい人の化粧箱を勝手に開ける人なんていませんし、誰にも見つかったことないと思います。……え、もしかして、お兄ちゃんにそういう道具が見つかったんですか？」
「う……」
「マジですか！　え、どんな風に見つかったんですか？　ていうか何が見つかったんですか？　ねえねえ！」
「小町ちゃんノリノリだね!?」
　めぐりの自慰用の道具が八幡に見つかったと知った途端目をキラキラとさせる小町。

自分じゃない人のこういった話は大好物なようだ。
「ていうか、お義姉ちゃんもオナニーするんですね。もしかして、あまりお兄ちゃんとHなことできてないんですか？」
「はっきり言わないでよぉ、それに、その、できてないわけじゃないんだけど、お昼とか家に1人でいると何て言うか、ちょっとだけそういう気分になっちゃって……」
「あー、なるほど、確かに開放的になっちゃいますよね。この家結構広いし。あ、もしかしてお昼は大胆にリビングや廊下とかでやっちゃってるんですか？」
「ちゃんと寝室でやってるよ!?　って、何言わせるの!!」
うぅ～と両手で顔を覆い、俯くめぐり。
だが、小町からの質問は続く。
「それで、兄の反応はどうだったんですか？」
「あ、それなんだけど、多分八幡はあれがそういう道具だって気付かずに拾ったんだよね」
「気付いてない？　あ、もしかしてｉｒｏｈａですか？」
「何ですぐわかるの!?」
「それも気付かなかったということは、あの口紅型のやつですね！」
ビシィ！　と指をさし、探偵顔負けの推理をしてやったとドヤ顔をする小町。

「そっかー、お義姉ちゃんはあれでズポズポしてるんだー」
「ちょおおーー!!　ズポズポとか言わないで！」
「ああ、クリ派ですか？」
「いや膣内派だけど……って何言わせるのぉ!!??」
「あのぉ、さっきからお義姉ちゃんが勝手に自爆してるだけですからね？」
　めぐりもそれは自覚があるのか、顔を真っ赤にして肩を落とす。
「それでどこに隠してたんですか？」
「……ベッドの下」
「え、そのままの状態で？」
「う、うん。ベッドの下ならすぐに使いやすいし、袋とかに入れておくと、もし見つかったとき言い訳が面倒だけど、裸の状態で置いておけば見つかっても口紅が落とした拍子に転がってベッドの下に入り込んだって言い訳になるでしょ？　そして今まさにその状況」
「というと？」
「今朝、八幡がベッドの下で口紅を見つけたからドレッサーの上に置いておいたって言ってきて、案の定ドレッサーの上にそのまま置いてあって……」
「うわー、キツー。それって最後に使ったのっていつなんですか？」

「……」
「……？　お義姉ちゃん？」
「……今朝」
「……はい？」
「その、えと、今朝、八幡が起きる前にちょっとだけ……」
「……」
「……」
「えーと、今朝小町と彩加を見送ってくれましたよね？　その後？」
「……その前」
「……小町たちってお義姉ちゃんが作ってくれた朝食を食べたよね？　その後？」
「……その前」
「……小町たちって朝の7時くらいに起きたよね？　その時にはお義姉ちゃんはもう朝食の準備をしてたハズ。因みにお義姉ちゃんは何時くらいに起きたの？」
「……6時くらい？」
「そこだな？」
「……はい」
小町はまるで雪ノ下雪乃のようにこめかみに手を添えながら溜め息をつく。

「……つまり、お義姉ちゃんは朝の6時に目を覚まし、起きたばかりだというのに盛って、兄が横で寝ているのもお構い無しに1人自慰に耽っていたと。さっきの平日の昼間っていうのはどこいったんですか」
「う、うぅ～。その、必ずしもその時ではだけではないと言いますか……」
「ここまで来たらぶっちゃけて聞きます。お義姉ちゃんは結婚してから兄とHするのと1人で自慰行為をするの、どっちの方が多いんですか?」
「……えと、その……」
「……」
「……自慰行為です、はい」
　沈黙が痛い。
「そんなに欲求不満なら兄にもっと甘えればいいのに」
「で、でも、そういうのってそこまで行くのが結構大変じゃない?　すごく恥ずかしいし、何か淫乱とか思われそうだし……」
「お義姉ちゃんは馬鹿ですか?」
「ええ!?」
「お義姉ちゃんと兄は既に夫婦。そして子作りは夫婦の仕事です。ゴムを着けるか着けないかは当然ご自由ですが、行為自体が少ないというのは職務放棄です!」

「そこまでなの!?」
「と、いうわけで、小町がそういう雰囲気になるテクニックをお教えしましょう。ちょうど明日は日曜ですし、早速今夜試してください」
「ええ!? こ、今夜!?」
「ふふっ、善は急げですよ」
そこには昔と何ら変わらない小町の悪い笑みが浮かんでいた。

孔明小町

「なぁめぐり」
「なぁに？」
「これは、どういう状況なんだ？」
「いつも通り耳かきだよ？」
「それはわかってるんだが……」
「……？」
「何故そんなにズボンが短いのん？」
「ああ、お風呂上がりでまだ暑くてねぇ」
「いつもは風呂上がりでもちゃんとパジャマ着てるよな？　何で今日はそんなショートパンツを……」
「んー、何となくだけど……何か問題でもあった」
「……いえ、ありません」
　これは、確かに効いてるのかも！

「男とは皆女子の生足に弱いのです。ソースは小町の生足を見るときの彩加の反応」
突然、小町ちゃんの夜のテクニック講座がリビングで開催されました。リビングである話ではないのですが、まぁ八幡と彩加くんは仕事部屋にいるので大丈夫だと思う。
「生足……。でもわたし、基本ズボンだよ？　パジャマもズボンだし、たまにスカート履いてもロングだし」
「だからこそ、だからこそなのです！　普段は隠されて見えないふくらはぎ、太腿。普段は見えないからこそ、いざという時に見えたらそれはもうテンションＭＡＸですよ！」
ムフーと鼻息を荒くする小町ちゃん。何か小町ちゃんが興奮してない？
「ですが、そのいざという時とはいったいいつなのか？　今でしょ！」
「古い、古いよ小町ちゃん」
「コホン……、そこで、小町はある情報を入手しているのです。お義姉ちゃん、兄とよく耳かきをされてますね？」
「うん。よくお互いにしあってるよ？」

「最後にしたのは？」
「1週間くらい前かな？」
「ちょうどいいです。まさにナイスなタイミングです。今夜いつも通り耳かきに誘いましょう。で・す・が！」
小町ちゃんがバッと立ち上がりわたしのズボンを指さす。
「今夜はいつものパジャマではなく、極力短い短パンを履いて耳かきをするのです。つまりは生太腿への膝枕。これは興奮する！」
フンッフンッと更に鼻息を荒くする小町ちゃん。ちょっと怖いんですけど。
「因みに、ここからもっと細かい上級テクニックになってくるんですけど……聞きます？」
「詳しく」

――――
――
―

小町ちゃんの指示通り、太腿の半分くらいの長さの短パンを履いて耳かきをしていま

す。髪の毛が直接太腿に当たるので少しくすぐったいけど、八幡が直に感じられるからこれも悪くないかも。

八幡も最初は戸惑ってたけどもう今は慣れたらしく、いつも通り他愛ない話をしながら耳かきを続けている。

そろそろ小町ちゃんの言っていたターニングポイントがやってくる。今は八幡の左耳を掃除しているけど、こっちが終わり反対の右耳になったとき、いつも通りなら八幡はそのまま上体を反転させてわたしの方を向くように寝転がるハズ。小町ちゃん曰く、そこが狙い目らしい。

「……よしっ、左はいいよ。次右いこっか」

「はいよ」

八幡が頭を上げ、体を反転させる。その隙に何気ないお尻の動きで短パンを少しずり上げる。

小町ちゃんのアドバイス通りズボンの裾が緩めのを履いているため容易く短パンの裾がずり上がる。

そこに八幡の頭が再びわたしの太腿に乗せられる。

「……ッ!!??」

ここでわたしは恐ろしいことに気付いてしまった。これはヤバい。ど、どうしよう

……。

八幡の息が、ズボンの中に入ってくる……っ。

つい体をブルリと震わせてしまうと、それを変に思ったのか八幡が声を掛けてくる。

「め、めぐり？　大丈夫か？」

何故か声が上ずっていた。どうしてだろうと思って八幡を見ると、八幡は顔を赤くしながらチラチラとある一点を何度もチラ見していた。

う、うぅ～、小町ちゃんの言った通り、絶対パンツ見られてるよぉ。

そう、ズボンの裾が緩めなのは、ずり上げやすくする為ともう１つ、緩いが為にできた隙間から中を覗けるようにするためらしい。

つまりわたしは今、自分から八幡に下着を見せていることになるんだけど……これじゃあまるでわたしが痴女みたいだよぉ。

「う、うん。何でもないよ。それじゃあ右耳もやっていこうか」

そして、再び始まる耳かき。今度はお互い言葉数が減る。その理由としては、八幡はやはりわたしの下着が気になるみたいでチラチラと何気ない小さな所作の隙に中を覗こうとしている。いや、丸わかりだから八幡。バレてないと思ってるんだろうけど、バレバレだから。

まぁ自分から見せてる時点で人のこと言えないんですけどね。

そしてわたしは、八幡の息が当たるのを我慢するので精一杯。

恐らく八幡は息のことに関しては気付いてないんだろうけど、その普通の呼吸が隙間から中に入り込んでまるでわたしの大事な部分を撫でていくような感覚に襲われる。

「……なぁ、ちょっと震えてるけど、やっぱりその格好寒いんじゃないのか？」

「大丈夫、だよ？　これ結構モコモコしてるし、そこまで、寒くないよ」

八幡が喋ることで更に息がかかる。つい内股になってモジモジしてしまいそうになるが、それでは八幡が中を覗けなくなってしまうので、何とか我慢して気持ちいつもより広めに足を広げる。

そろそろ耳かきも終わりかけ、ここで最後に小町ちゃんから教わった一言を言えば、そのままそういう流れになるらしいけど、本当かな？　うぅ～、恥ずかしい。恥ずかしいけど、ここは小町ちゃんを信じよう。

わたしは耳かき棒を八幡の耳から抜き、自分の顔を八幡の耳元まで寄せる。そして耳元で囁くように……

「もうっ、さっきからバレバレだよ？　……八幡の、えっち」

「……ッ!!　わ、悪い!!」

八幡が慌てて頭を上げる。
危なっ！　もうちょっとで頭がぶつかるところだった。
……ていうか、恥ずかしいよぉ!!!!
う、うぅ～。今のは恥ずかし過ぎる。ほら、八幡も真っ赤になっちゃってるじゃん。
絶対わたしもこんな感じだよぉ。
あ、でも今ならいけるかも……
「……八幡」
ちょこんと八幡の服を摘まむ。流石にわたしから押し倒すのは恥ずかしいからわたしは目を瞑ってそれを待つ。
「……ッ。め、めぐり……」
八幡の手がわたしの肩に置かれる。八幡の顔が近付いて来るのが気配でわかる。
そしてゆっくりと、お互いの唇が重なった。